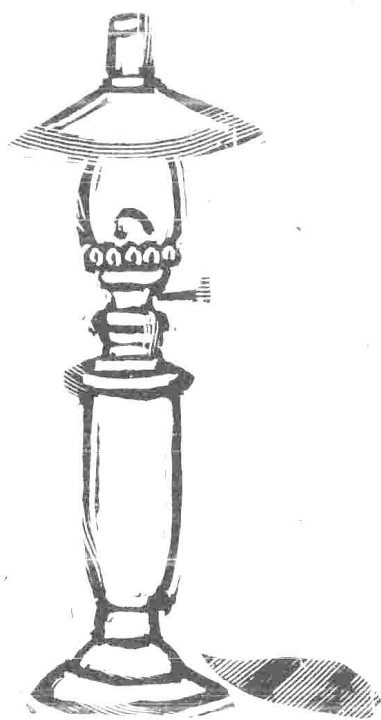


小說菊池
寬杉森
久英中
央公論社

說菊池寬

杉木久英



中央公論社

小説菊池 寛

定価一六〇〇円

昭和六十二年十月十日 初版印刷

昭和六十二年十月二十日 初版発行

著 者 杉 森 久 英

発行者 嶋 中 鵬 二

印刷所 図 書 印 刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

振替東京二三四

© 一九八七 検印廃止

ISBN-4-12-001619-6

小說 菊池寛
目次

恋文

7

好色

50

京洛

86

文壇へ

112

不和の顛末

134

流行作家

168

仮面を剥ぐ

192

チャランケ

今東光の反乱

天下恐るるものなし

戦雲の中

あとがき

225

255

285

313

347

装
幀

三
井
永
一

小説
菊池
寛

恋文

菊池寛の家系は、代々四国高松藩の儒者だった。

五代ばかり前の祖先に、有名な漢詩人菊池五山がいた。五山は若年のころ郷里を出奔、江戸へ出て、市河寛斎の門に入り、詩壇の第一人者となった。そのころ、江戸で各界の第一といわれる名前をならべた戯歌に、

詩は五山 書は鵬斎に 画は文晁 芸者お松に 料理八百善

というのがあるが、なお五山は文晁、鵬斎と共に、芸苑の三絶といわれた。いずれにしろ、五山は詩人として、一世にぬきんでいたのである。

もっとも、そのころ蜀山人に、

詩は詩仏 書は米庵に 狂歌おれ、芸者小万に 料理八百善

という作があり、これには五山が入っていないが、それは作者の主観によるもので、五山の名を否定するものではない。「狂歌おれ」というところに、蜀山人の自負と諧謔を見ることができよう。そして、菊池五山と大窪詩仏はたがいに気の合った友人であった。

五山という号の由来については、彼の代表作「五山堂詩話」に、次のような記載がある。

余貧にして書を貯ふる能はず、偶々購ひ得る有るも、早く已に羽化し去る（註、飛んでいった）。篋中（本箱の中）に集五部を留む。一は白香山、一は李義山、一は王半山、一は曾茶山、一は元遺山なり。此を外にしては有るなし。因て五山を以て堂に名づく。句あり、云ふ「家は徒に四壁立ち、書は僅かに五山存す」と。

五山が郷里を出奔したのは寛政九年、三十歳のときだったが、文名が揚がると、脱藩の罪を許され、藩侯の記室（秘書官）とでもいおうかに再雇用された。しかし、彼は高松へ帰ることなく、江戸の文人墨客との交遊を楽しんで、一生を終えた。

五山という人はなかなか処世の術にも長けていたらしく、地方の文学好きの金持ちにうまく取り入って、遊興費や生活費を出させたり、著書の出版費用を分担させたりするかわりに、相手の凡庸な作品を「五山堂詩話」に載せてやるようなことを、平気でやったらしい。

もちろん、寛の生き方は五山の血をひいているなどと言うわけではない。寛はもっと清潔で、純粹で、人情の弱みにつけこんだりせず、正々堂々と生きた。才能に恵まれて、天下に名声を馳せたという点では共通しているが、処世の方法はちがっていた。

五山の祖父を黄山といった。この人は菊池家中興の祖といわれ、屋島の台地の麓の古高松に住んでいたが、青年時代の平賀源内が彼に漢学を仕込まれたといわれている。

こうして菊池家は代々高松藩の儒者として重きをなしていたが、寛の父武脩（たけちか）のとき、明治維新に際会し、廃藩となって、一家は俸禄を失った。俸禄そのものは、三兩五人扶持という少額のものだが、藩儒という地位に対する信用は、塾の経営、著作、その他さまざまな副収入をもたらし、

家計はそれほど窮迫したものではなかったはずである。しかし、維新の変革は、それらのすべてを一家から奪い去り、父武脩は小学校の庶務係職員となつて、家族を養わねばならなかった。

武脩は嘉永二年の生まれだったから、明治元年には数え年二十歳で、寛が生まれた明治二十一年には四十歳だったが、家族は妻のほか、寛をいれて三人の男児と一人の女児があり、収入は小学校の月給八円と、十石ばかりの田地から上る米（二ヵ月に一俵くらいになる）だけだったから、家計は楽とはいえなかった。

いま残っている一枚の写真によると、寛の父武脩はなかなか整った、品のいい顔立ちをしているが、どこか正直で、生一本で、裏も表もない、まじめ一方の人物だったように見える。こつこつ学問をすれば、一かどの業績を残したかも知れないが、維新の混乱の中で、処世の綱渡りをうまくやってのける俗才があったらうとは、到底思えないような人柄である。寛の少年時代の記憶が、いつも貧乏と共にあったのも無理はないだろう。

彼の「半自叙伝」によると、高等小学校三年のとき、寛は教科書を買ってもらえず、友人の本を借りて、写本した。そのうち、借りた本を紛失したので、どうしても買って返す必要が生じ、新しい本を買ったところ、なくしたと思っていた本が出て来たので、結局、彼は人なみに教科書を持つことができた。しかし、このことは彼の記憶になまなましく残り、のち戯曲「父帰る」の中に、次のような科白として生かされた。

賢一郎（やや冷かに） 僕達に父親があれば、八歳の年に築港からおたあさんに手を引かれて、身投げをせいで済んだ。あの時おたあさんが誤つて水の浅い処へ飛び込んだればこそ、助かつておるんや。俺達に父親^{ておや}があれば十の年から給仕をせいで済んだ。俺達は父親

がない為に、子供の時に何の楽しみもなしに暮して来たんや。新二郎、お前は小学校の時に墨や紙を買へないで泣いてゐたのを忘れたのか。教科書さへ満足に買へないで写本を持つて行つて友達にからかはれて泣いたのを忘れたのか。俺達に父親があるもんか、あればあんな苦勞はしとりやせん。

戯曲だから、主人公に父親がないことになっているが、現実の寛には、父親がいながら、本を買ってもらえなかったのである。もつとも、ここで推測をたくましくすれば、父はまったく経済的理由だけで寛に写本を命令したかどうか、という疑問も出て来ないではない。儒者の家で成人した彼は、印刷された書物をそのまま教科書に使うより、一字一句、自分の手で写した本で習うことに、勉学の真髓を見出していたかも知れないのである。

同じく「半自叙伝」によると、修学旅行にやつてもらえなかったことも、心の傷となった。一人だけ仲間はずれになる淋しさは、子供には堪えられない。あるとき、彼は泣いて父親に強請したところ、父はうるさがって寝てしまった。それでも彼は強請を続けていると、父親はガバと蒲団の中で起き上って、

「そんなに俺ばかり恨まないで、兄を恨め！ 家の公債はみな兄のために、使つてしまつたんや」

といった。公債というのは、維新の瓦解のとき、生業資金として士族に分配された秩禄公債である。寛のすぐ上の兄巳之助は、頭はそう悪くなかったが、性格に放縦なところがあって、教師に憎まれたものか、中学でたびたび落第して、放校になった。以後、家では厄介者になっていたので、このへんの状況も、「父帰る」の中に生かされている。

日本の家庭ではよくあることだが、菊池寛も父親より母親に愛着を抱いていた。彼は、「家は貧しかつたけれども、母はよく愛してくれた。私の母は賢母だったかも知れない。忍苦欠乏に堪へて、多年私の家の貧乏世帯のきりもりをしたものである」

と言ひ、父親については、

「私は父の愛を知らなかつた」

といつてゐる。しかし、彼はその理由を承知していた。

「貧しい家庭では、父は容易にその愛情を示すことが、むづかしい。母は、衣物をこさへたり、第一、食物を与へたりすることで、いくらでもその慈愛を示すことが出来るが、玩具を買ふだけの金もない父親は、愛情を示す手段が甚だ少いのである。母は、自分で機を織つて着物をこさへてくれた」

といつてゐる。たしかに、日本の家庭では、働き手は父であるから、貧乏の責任はすべて父に歸せられる。家計が苦しいのは、父がしっかりしていないから……父が無能だから……父が人にだまされたから……父が事業に失敗したから……父が浪費したから……ということになる。そして、その跡始末をさせられるのは、常に母親であつた。

菊池寛の母親カツがどんな人であつたかについては、杉峰俊男氏と中井敬子氏（『四国文学』同人）の詳しい調査報告がある。

カツは安政三年（一八五六年）、香川県三野郡仁尾村（現在の三豊郡仁尾町）に生まれた。菊池家に入籍したのは、明治十一年である。四男の寛を生んだのは、それから十年目であるが、それまでの三人の男児のうち、次男は死亡していた。

仁尾は、高松と同じ讃岐のうちだが、江戸時代は丸亀藩五万石の領内にあって、瀬戸内海に面する良港であった。カッはこの村の豪商吉田亀治の長女に生まれ、少女時代は豊かに、幸福に過したと想像される。

仁尾は室町時代、幕府の管領細川頼之の支配下にあつて、勘合貿易で入る綿の類や、瀬戸内の船荷で繁昌したが、徳川時代、京極家が丸亀に入部してからは、酒、醬油、酢、油と、醸造業者が軒をならべるようになった。

そこへ新しく、茶の販売が加わることになった。土佐の山内侯は、江戸への参観の途中、船で外洋をゆくと、たびたび海難で被害を受けたので、なるべく陸上の道を取ろうとして、選んだのが、仁尾の港だった。高知からまっすぐ北へむかつて、四国の脊梁をなす山脈を越えようと、仁尾である。ここで船に乗ると、危険はほとんどない。享保三年以来、山内家はこの村を江戸への往復の港とした。

平凡な港町にとって、土佐の太守を送迎するということは、大事件である。町を挙げて歓待の誠を尽すうちに、双方の情誼が深まり、山内侯は土佐の山間部に産する茶の販売権を、仁尾へ許すことになった。仁尾にとって有利な取引きであることは勿論だが、土佐にとっても、販路拡張の一助になるから、悪いことではない。こうして、土佐の茶は「仁尾茶」という名前で売り出された。その商人十二店の筆頭が吉屋といつて、代々庄屋を勤める家であった。本姓は吉田である。この家について、中井敬子氏は次のように書いている。

仁尾では酒の醸造元だが、阿波の出店は遠く堺や名古屋まで、藍を商った。現在の松江（塩田家）、北前船の株持ちで、豪商ぶりが今に伝わる干鰯（ほしか）問屋の草木屋（浪越屋、

高松領内でも八百石の酒を造った三倉屋（富山屋）等々、広汎に活躍した仁尾商人の名が浮かんで来ますが、伝えられる吉屋の屋敷が、浜の御番所を傍に、一文字の湛保（たんぼ）へは石畳を五十歩・百歩を下るだけの、茶や水物の荷役の迅速を計って最適の場を占めていたことを知り、海路を広く商った老舗の知恵を見せられます。

累代の庄屋であり、茶の筆頭家であったことを思えば、商いの規模は前述の大店に伍して、決して遜色はなかった筈です。「菊池寛の母の生家」「菊池寛資料集成」所収

（註、「湛保」とは、海中の浅瀬へ石垣を築いて、水路を作り、舟を着けることができるようにしたもの）茶の販売を許されたときの吉田家の当主は、五兵衛包卓かねたかといったが、その曾孫の五兵衛則備（通称亀治）の代にいたって、維新の混乱がはじまり、吉田家の家運は、他の大商人のそれと共に傾いていった。菊池寛の母カツは、この則備の娘である。お乳母日傘で、夢見るような少女時代を過した彼女は、次第に迫り来る貧苦を肌を感じながら成長し、やがて、昔は考えられもなかった貧乏士族の家へ嫁いで来たわけである。

寛は「半自叙伝」の中で、

「母は芝居が好きで、歌舞伎狂言の筋に精しかつた」と書いているが、これについて中井敬子氏は言う。

……カツにとつての芝居は、単に好きだったから、というのではなく、芝居に連なるかつての吉屋の繁栄の日が、心に戻る場所であり、ここでつらさの一切合財を忘れていたろうと思うのです。

県下の人形浄瑠璃は、文政年代ころから盛んになったということですが、商いの上でも暮

らしの上でも、上方に傾倒することの多かった仁尾の人たちが、浪花の華の浄瑠璃に無関心でいられる筈もなく、カツが生まれた時代は町内の富裕な旦那衆の人形浄瑠璃一座や、素人歌舞伎が生まれていて、秋祭りに奉納の名をかりて、加茂神社の外苑や、吉祥院の広小路で盛大な披露をしていた時でした。木戸銭無料の、しかも金を惜しまず年々に趣向を変えた上演は、十萬石の格式といわれた祭礼と併わせて、人気を盛り上げ、稽古に入った祭り囃子や太棹の音に、前広い中（註、早いうち）から町中こぞって酔う日を待つ、という奉納芝居の最も盛んな時でした。

商いの得意先や、土佐の山部の茶の百姓を、祭の客に招いて芝居を見せるのも、商家の習慣でした。“茶”の吉屋が、家格の上でも、祭りや芝居に大口の勧進に応じて、力があつたでしょうし、上演場所の加茂神社と吉屋の屋敷は、目と鼻の近さでしたから、幼い日から、旦那衆の稽古ぶりや、浄瑠璃のふしに馴れ親しんだカツが、筋書や外題に明るかつたのも、一つはこの故だったと考えます。

たしかに、西国の商家の人たちは、浄瑠璃の中で育つたといっていだらう。そして、そういう人を母として生まれた菊池寛が、のちに劇作家として成功したのも、不思議ではなかった。

なお、母カツは富裕な家に生まれたけれど、貧困な家庭に馴れて、子供たちの着物は自分で機を織ってこしらえた。しかし、寛は呉服屋で売っている紺ガスリの着物が着たくてたまらなかった。人の着ているものを着ることができないということは、屈辱であつた。

小学校のころの菊池寛は、読書好きで早熟の少年だった。彼は尋常四年のころ、恋という字の意味を知っていたと書いている。現代の子供ではそれくらいは普通のことだが、そのころ一般の